

第5回 ディスレクシアセミナー in Fukui

ICT支援室開設に至る歩みとICT支援室の実践報告



平谷美智夫院長

発達性ディスレクシア（以下DD：読字障害）は文字をすらすら読めず書くのも苦手です。

自閉スペクトラム症の子どもたちは読字には問題がなくても書字が苦手です。

クリニックでは10年前からICTを利用した療育活動を展開してきました。中でも開設3年のICT支援室はDDの子どもたちに将来の大きい夢を与える場に発展しつつあります。その3年間の歩みを紹介します。

期日 令和4年10月2日（日）10：00～12：30
ZOOMを使ったオンライン配信（後日録画配信あり）

10：00 講座1 平谷こども発達クリニック院長 平谷美智夫
学習障害特に読字障害の診断と療育：30年の歩み

10：40 講座2 ICT支援室 吉田高志
ICT支援室3年間の取り組み
—DD児へのパソコン支援を通して—

11：10 休憩

11：15 講座3 福井大学 学術研究院工学系部門 高橋泰岳
運動記憶によるキーボード入力スキル習得を目指した
練習アプリの開発

11：30 講座4 ICT支援室 石丸真一
うちの子（読み書き障がい）は、大丈夫とされている
お母さんへ

11：45 講座5 福井大学教育学部 藤岡 徹
ICT支援室の取り組みが心理面に与える影響

12：00 Q&A

予告なく内容の一部を変更することがありますのでご了解下さい



高橋アプリ



キーボードを隠してタイプ



ICT支援室四ツ井事業所

参加費 一般2000円、保護者1000円 学生500円 ※peatixよりお支払い下さい。

申込先 peatix「第5回ディスレクシアセミナー in Fukui」

URL：<https://https://disurekusia.peatix.com/>

お問合せ 医療法人平谷こども発達クリニック 第5回DDセミナー係

E-mail：hiratani.seminar.2019@gmail.com



第5回ディスレクシアセミナー in Fukui 講座の概要

- ①ICT (Information and Communication Technology) 通信技術を活用したコミュニケーション学
- ②読字障害 (発達性ディスレクシア: Developmental Dyslexia=DD)

講座1: 学習障害特に読字障害の診断と療育: 30年の歩み

平谷こども発達クリニック院長 平谷美智夫

限局性学習症 (LD) の多くは病態理解や検査方法が乏しく診断基準もあいまいであり治療は教育そのものになることが多い。LDのうち読字障害 (DD) は『症状の普遍性とその病態・遺伝・脳病理所見・予後についての解明もすすみ、一つの疾患単位と認知され医療の対象となってきた (小枝)』。DDは学業成績が振るわず、児童は自尊感情の低下に苦しむ。DDへの対応の柱である合理的な配慮が教育現場に浸透しつつあるが、まだ不十分である。CLでは、約10年前からICTを利用した療育活動を展開してきた。中でも開設3年のICT支援室はDDの子どもたちに将来の大きい夢を与える場に発展しつつある。本講座ではLDに関わりICT支援室開設に至るまでの30年の実践を紹介する。(子どものこころと脳の発達 Vol.11 No.1 2020より)

講座2 ICT支援室3年間の取り組み -DD児へのパソコン支援を通して-

ICT支援室 吉田高志

ICT支援室では、毎年60名から90名の子どもたちを受け入れてきた。いずれもADHD・ASD・ADHD+ASDの診断を受け、うち6割程度がDDを併存している。読み書きに困難さを抱えるため成績低下に苦しみ自尊感情を低下させている子も多い。こうした子たちには「ICT機器を活用するスキルを高めることに尽きる」という考えから支援を行ってきた。その中核となるキーボード操作能力については昨年報告したようにかなりの成果が上がってきている。そのための指導法・ソフトの開発について述べたい。また、多様な特性を持つ子たちのニーズに対応すべく、デジジー教科書を使った読みの指導、作文指導、受験指導、ゲームを使った交流活動なども取り入れてきている。こうした取り組みと成果についても報告したい。最後に、学校関係者に是非お願いしたい合理的な配慮について述べたい。

講座3 運動記憶によるキーボード入力スキル習得を目指した練習アプリの開発

福井大学 学術研究院工学系部門 高橋泰岳

読字・書字障害の児童のICT機器活用のなかで児童のキーボード入力能力の向上は重要な課題の一つであるが、多くのキーボード入力練習アプリは日本語の単語や文章をローマ字として提示し、キートップに描かれたアルファベットを探させて、打たせている。しかし、ひらがな/カタカナの音をローマ字に変換し、そのアルファベットを探すことが、読字・書字障害の児童には困難である。そこで、文字入力の間にローマ字への変換を挟まず、文字の音からキーボード入力の指の動きへの運動記憶を強化するための練習アプリとして、ローマ字やキートップのアルファベットを表示せず、キーボードの位置のみを練習者に提示する新しいキーボード入力練習アプリを開発した。これを初歩的なキーボード入力の練習が必要な児童がICT支援室で利用している。本報告では本アプリを使って練習した児童のキーボード入力の正確性や流暢性の推移や、稲垣式・WISC・STRAW等の検査結果と正確性や流暢性の相関について、現在の知見を述べたい。

講座4 うちの子(読み書き障がい)は、大丈夫とされているお母さんへ

ICT支援室 石丸真一

多くのお母さんが次のように話します。「〇〇は、音読もできるし、ノートも書いています。漢字は苦手だけど、学校に楽しく通っています。」学校の先生も同じです。「一斉音読もできます。板書も取れています。何が問題なのですか。」読み書き障がいだから、全く読めない、書けないと思いがちです。だからうちの子は大丈夫と思います。読み書き障がいを正確にはDD (発達性ディスレクシア) といいます。DD児の多くは読めるし書けます。できるのは努力しているからです。大人が思いもしないほど脳力を使っているからです。DD児は読み書きで多大な脳力を使います。その結果、読んで覚えたり書いて記憶したりするための余力が少なくなります。そのため読んで覚えたり、書いて覚えたりすることが難しいです。これが多くのDD児が抱える困り感です。ICT支援室では、この問題に対応する様々な支援を実践検討しています。また学校に支援をお願いしています。始まったばかりの実践ですが応援していただけると嬉しいです。

ICT支援室の取り組みが心理面に与える影響

福井大学教育学部 藤岡 徹

読み書きが苦手な児童生徒 (以下児童) に適切な支援や合理的配慮がなされないまましていると学習性無気力を抱えてしまうとされる。このことから、読み書きが苦手な児童への支援が、児童心理面にどのような影響を与えているかを明らかにする意味は大きい。そこで、これを明らかにするためにICT支援室に参加する児童と保護者41名ずつに、半構造化面接で聞き取りを行った。保護者への聞き取りの結果、学校でICT機器を使用している児童は63% (26名) であり、家庭以外でも61% (25名) が宿題で、44% (18名) が調べ物でICT機器を使用していた。参加児童にキーボード入力と手書きのどちらが負担感が少ないかを聞くと、キーボードと78% (32名) の児童が回答した。参加している児童の32% (13名) が、ICT支援室に通って自信がついたと回答していた。ICT支援室での取り組みは、児童の負担感を減らしたり、良い心理的影響を与えたりすることが示唆された。